職人をとりまく和紙業界の現状と伝統技法の継承のあり方

Traditional Craft “Washi” and Succession of Craftsman Ship

00-2238-4　丸谷耕太
指導教官　樋口洋一郎

第1章　はじめに

1－1研究の背景・目的

日本人は日本の風土と歴史の中で育まれた工芸品を永く慈しんで生活してきた。和紙もそれら工芸品の一つである。工芸品は、職人がその技を継承し続けてきた結果として、今も私たちの目の前に存在している。

明治に入り大量生産が可能な洋紙が日本に持ち込まれると、それまでの和紙の役割は洋紙に取って代わられた。和紙産業はその需要を大幅に減らすこととなり、和紙に従事する人々も劇的に減少した。これ以外にも和紙業界の状況の変化は伝統技法の継承を阻害する外的要因として、個々の職人に大きな影響を与えてきたと考えられる。減少している後継者の問題や伝統技法を将来に継承するための方策は、職人という存在抜きでは語れない。職人をとりまく諸問題はどのようなものかを把握した上で、そのような状況の中、職人がどういった意識を持ちつつ伝統技法を継承しているかを明らかにする必要がある。

以上の背景より、本研究では次の３点を明らかにする事を目的とする。

①和紙業界の伝統技法の継承をとりまく諸問題

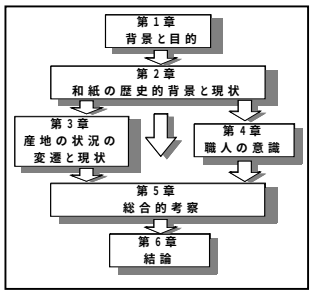
②実際に仕事に従事する職人が、現状や工芸に対してどのような意識を持っているかを把握した上で、和紙の歴史の中で育まれてきた紙つくりの技法をどのように継承しているか。

③これからの伝統技法の継承のあり方

伝統工芸に関わる先行研究としては、戸田[1)]、玉井[2)] がまちづくりの視点からそれぞれ伝統工芸について考察している。また、経済学の視点から森[3)]が伝統工芸の産地形成について考察している。しかし、いずれの論文も職人についての言及は少なく、職人の視点からの考察は見られない。

1－2　本研究の構成

第２章では和紙の歴史的な背景と現状を全国的な動向として把握する。第３章で個々の産地における状況の変遷について考察する。第４章で実際に職に従事している職人の意識を把握する。第５章で総合的に考察を行い、第６章で結論を述べる。



【図1】論文構成

第2章　和紙の歴史的背景と現状

2－1　目的と調査方法

文献調査によって、産地や職人について考察する上で必要な和紙の歴史的な背景や現状を把握することを目的とする。

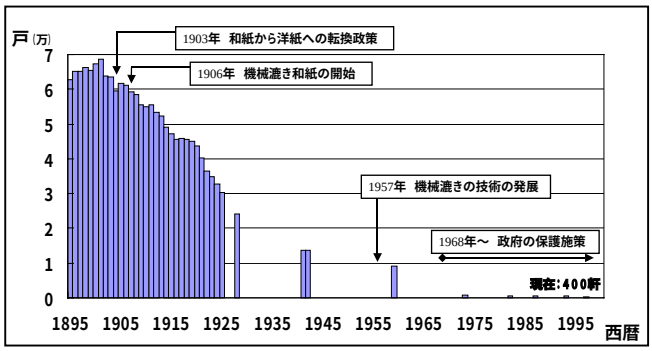
2－2　和紙の歴史的背景

明治になり洋紙が日本に伝わると、政府は1873 年に郵便切手用紙を和紙から洋紙に変更し、また、1903 年には小学校の教科書を国定とし、それまで用いていた和紙を洋紙に変更した。この和紙から洋紙への転換政策により、和紙業者数は 1906 年を境に減少の一途を辿った。

この洋紙の量産と輸入に対抗すべく、和紙業界は様々な改良を試みた。1883 年頃から煮熟に苛性ソーダを用いて薬品による作業の省力化を行い、1890 年には作業の機械化をするところが増えた。1894 年に円網抄紙機でナプキン原紙を製作したのをきっかけに 1906 年に本格的な機械漉き和紙の生産が始まった。1957 年には懸垂式短網抄紙機が登場し、和紙によく似た紙を機械で漉くことが可能になった。しかし、これら和紙つくりの機械化はかえって手漉き和紙業者数の減少に拍車をかける結果となった【図２】。このような著しい和紙業界の衰退に対し、政府はようやく保護政策の必要性を感じ、1968 年から重要無形文化財などの指定を開始している。

2－3　近年の和紙の状況

現在も和紙業界は衰退の傾向は続いている。その要因として、需要の大幅な低下、原料の産出量の減少、後継人の減少という問題が挙げられる。また、機械技術の高度化により、消費者はもとより紙を扱う販売店の人でさえも、機械漉き和紙と手漉き和紙の区別が難しいという状況に陥り、和紙としてのアイデンティティが失われた。しかし、最近は需要の低下の中で、手漉きの和紙でなければならないといわれる表具紙類や画仙紙と美術工芸紙・民芸紙類を重宝する傾向が高まって、新しい流れを形成している。また、後継者不足が高唱される中で、家業を継ぐのではなく新しく和紙産業に就いた者も全体の約４割を占める。



【図2】手漉き和紙業者数の推移[4)]

2－4　現在における和紙の製造所の状況

全国 400 軒の和紙業者を対象とした統計データの集計から、次のことが明らかとなった。和紙の製造所となる漉き場は昔からの家族作業という性質を色濃く残しており、３人以下の小規模経営は全体の 78%を占める。しかし、以前の冬季を凌ぐための生業としてではなく、専業化を行っているところが多い。作業の省力化や生産力を上げるために機械や薬品が多く導入されているが、より良い紙をつくろうと、昔ながらの製法にこだわる者も存在する。

第3章　産地の状況の変遷と現状

3－1　目的と調査方法

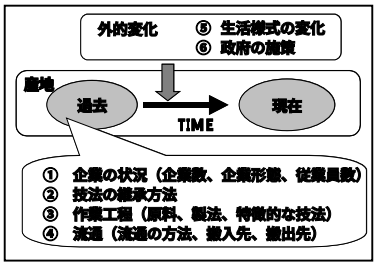
明治以降、産業に対する時代背景が変わっていく中で、個々の産地がどのような変遷をたどり現在どのような状況にあるかを文献調査及びヒアリング調査によって明らかにすることを目的とする。

3－2　調査の概要

調査は 2003 年 10 月から 2004 年 1 月にかけて行った。【表 1】に挙げた産地の職人 15 人を対象とし、1 対 1 で【図 3】の質問項目に沿って自由に回答してもらった。調査時間は 1 時間から 5 時間である。

【表 1】調査対象となる産地

業種	品目	場所
和紙	越前和紙	福井県今立郡今立町
	小川和紙	埼玉県小川町･東秩父村
	軍道紙	東京都あきる野市
表具	江戸表具	東京都
からかみ	江戸からかみ	東京都



【図 3】調査項目の位置付け

3－3　結果と考察

（①から）各産地とも、昭和の初期に企業数・従業員の数が増加から減少に転じている。中でも、軍道紙は 1964 年に一度、紙漉きが途絶えてしまった後、1979 年に市の政策により復活している。

（②から）伝統技法はどこも家または工場で継承されていた。しかし、後継者不足から越前和紙、小川和紙では研修制度を設け、江戸表具では学校が設立した。

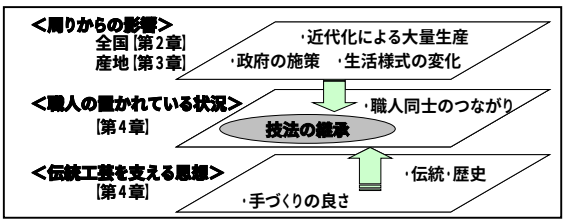
（③から）越前和紙の「黒すかし」など、どの産地も特徴的な技法を昔から有しているが、全国的動向と同様に明治以降に製法の機械化が行われている。機械だけを専門に扱うものが増え伝統技法に従事する者の減少を招いた。また、新素材を原料に取り入れる産地が多い。現在は伝統技法だけでは生計が成り立たないというところも多く、機械と手づくりの使い分けがなされている。

（⑥から）全ての産地で政府の指定を受けているが、和紙の産地では、政府が伝統工芸の指定をして体験・研修施設を建設している。

第4章　職人の意識

4－1　目的と調査方法

実際に職に従事する職人が伝統技法の継承をどのように考え、どのような意識を持って仕事をしているのかを把握するために、第３章の調査と平行してヒアリングを行った。質問項目は【図４】に挙げる。



【図4】調査項目の位置付け

4－2　結果と考察

（働き始めたきっかけから）仕事を始めたきっかけとして、「家業を継いだ」という人が比較的多かった。それ以外の人は、「和紙への興味」や「現在の伝統工芸への憂慮」から新しく和紙に携わりたいという人であった。

（職人のつながりから）「仕事でのネットワークがある」という意見も見られるが、紙漉きの職人は「つながりが希薄だ」と答える人が多かった。特に、越前和紙ではこの傾向が強い。一方、江戸表具の職人は開放的で、「*分からないことや疑問があると仲間に聞く*」ことも多い。

（技法の継承についてから）技は、「人から学ぶ」という人が多いが、中でも「仕事を見て学ぶ」という意見を挙げる人が非常に多い。傍にいて仕事の動作の一つ一つを見ていることが修行であり、あとは自分で学んでいくというのが当然と考えられている。自分で学ぶ中でも、「*みんながより良いやり方を柔軟に取り入れている*」うちに自分のやり方を発見していくようだ。

（手づくりの良さから）手づくりのものは「*作っている人が手を抜けないところが良さにつながる*」など、「*気が入っているところが良さ*」であり、「気持が買い手に伝わるところが良い」という意見がある。この「*客とのつながり*」が重要だという意識が強い。また、手づくりは均一のものができず、風味などといった「何とも言い得ない良さ」が存在する。しかし、「手づくりがそのまま良さにつながるのではない」という意見も見られ、手づくりでも悪いものもあり、機械でも良いものがつくられていると感じている職人も存在する。

第5章　総合的考察

和紙は平安時代までは貴族のみに親しまれた貴重なものであった。その後、一般の人に生活品として用いられるようになる中、量産や製法の省力化に意識が流され、技法が蔑ろにされることとなった。しかし、最近は美術品としての新しい紙の価値が生まれている。だからこそ、いま一層、手漉きなどの伝統技法の重要性を再認識する必要があるだろう。

現在は、安価で多くの人に好まれる紙の生産は職人の生計を確立するには必要である。新しく仕事につく人は、和紙全体と自分たちのつくろうとする紙の位置付けを把握する必要がある。機械ものと手づくりのものの区別が難しいという中で、どこに和紙の良さがあるかを認識し、機械と手づくりを使い分けていかなければならない。

また、家族経営が色濃く残る中、家業が継がれなくなる現状がある。この状況の中で、今、和紙への興味から新しく仕事を始める人のあり方を考えねばならない。伝統技法が見て学ぶことであるからこそ、彼らは前の伝承者とともに在る必要がある。家族経営から「つながりが希薄だ」という職人の世界において、新しく仕事を始める人が弊害なくその中に入っていける環境づくりが必要である。

第6章　結論

本研究より以下のことが明らかとなった。

① 和紙業界の衰退には、近代化による和紙業界の機械化や生活様式の変化による需要の低下が大きな影響を与えた。

② ①の状況の中で、機械と手づくりのお互いの良さを認めた上で、手づくりとしての良さを生かし、機械の出来ない領域を手づくりに求めていこうとしている。技法の継承には何か特別な方法というものよりは、職人が「見る」ことによって学ぶことが重要視されている。

③ 安価で大量にできる和紙が多い今日、新しく仕事につく人が苦なく職に就ける環境が必要であり、機械のものと手づくりのものとの違いを認識し、自分のつくるものの位置付けを意識することが必要である。

中国から伝わった紙つくりは、これまでに何人もの人が改良を施した結果、現代の和紙として継承されている。この技は、その作業工程をいくら記録に残しても決して次に継承できるものではない。その難しさは職人が一番に理解している。技は機械の中に在るのではなく、書物の中に在るのでもない。技は人の中に在にあるのだ。だからこそ、これまでの技の伝承は見ることが重要視されている。職人が長い年月をかけて、他の職人の仕事を見て覚えること、そして自分で試して学んでいくことによって、今まで、そしてこれからも技は伝承されていくのだろう。

<主要参考文献>

久米康生（1995）：「和紙文化辞典」：わがみ堂

全国手すき和紙連合会（1988）：「和紙の手帖」

和紙文化研究会（2003）：「和紙文化研究　第十一号」

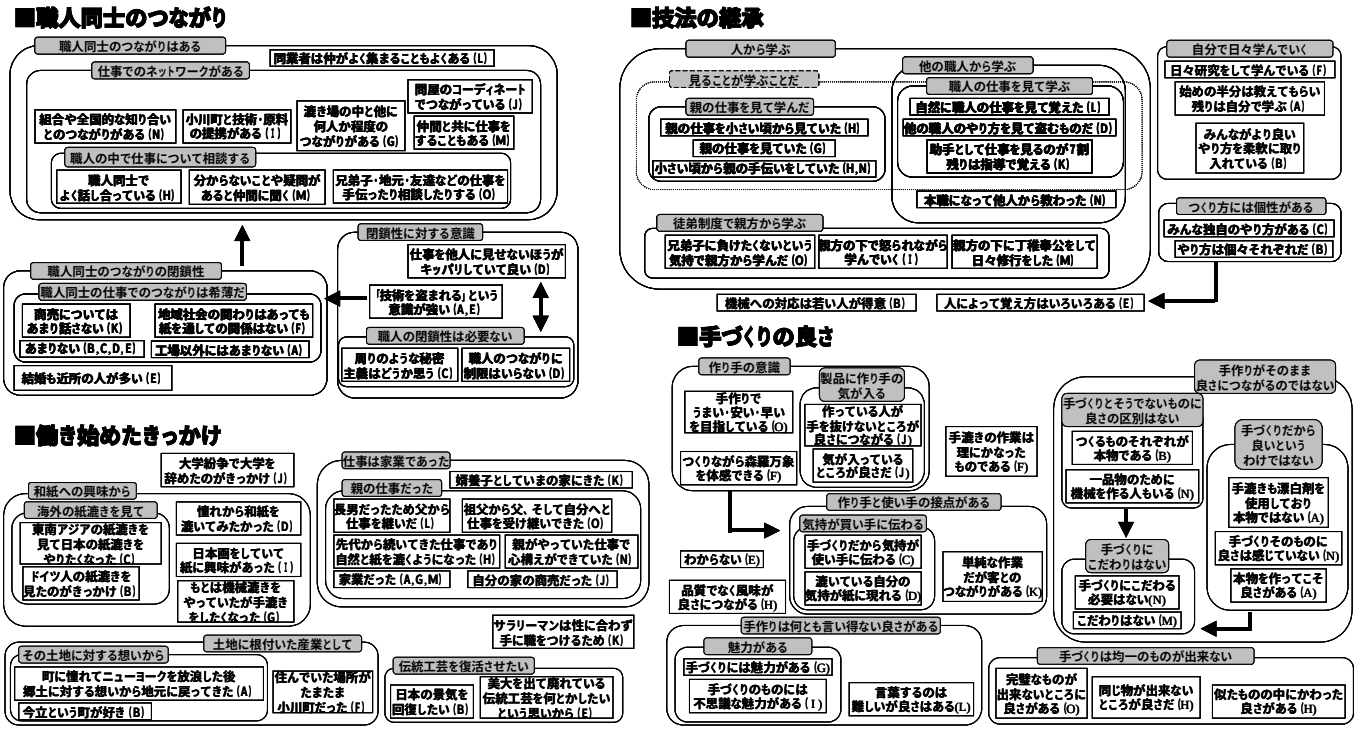
<補注>

1）　戸田和宏（1997）：「伝統的工芸品の観光的活用手法に関する研究」：都市計画学会論文集、N032、p.271～276

2）　玉井明子（1999）：「地場産業地域における観光活動設計とまちづくり」：都市計画学会論文集、N034、p.355～360

3）　森文雄　（2001）：「伝統産業の新たな産地形成について－漆器産地の伝統的構造からの変革－」：日本消費経済学会年報、第23集

4）　「日本統計年鑑」「日本手漉工業組合聯合会　組合名簿」「全国手漉き和紙製造業者名簿」　より作成



【図5】職人の意識